

加茂雄三著

## 『ラテンアメリカの独立』

(世界の歴史第23巻) 講談社 1978年 390ページ

## I

著者加茂雄三氏は、ラテンアメリカについて多くの論文と著書を著わし、時評・論評等においても活躍する、わが国の数少ないラテンアメリカ史研究者の一人である。著者は、これまでに、特にキューバ革命、ラテンアメリカの民族主義運動、国際関係等に関するテーマで論文を発表してきた。これらの幅広い活躍と業績から判断すると、ラテンアメリカ近現代史を専攻する著者の関心の核心は現代ラテンアメリカの民族解放と変革の問題にあるように思われる。このような現代ラテンアメリカ問題へ強い関心を抱く著者がこれまでの研究の延長上で書いたものが本書であり、本書は言わば「ラテンアメリカの発展を歪めた先進欧米資本主義体制への告発の書」ともいえるべきものである。

本書は、簡潔に言って、ラテンアメリカの歴史を「人民抑圧の歴史」という視角から捉えた、この地域の近代および現代を扱った概史である。本書のタイトル「ラテンアメリカの独立」は、この地域の独立は19世紀はじめの政治的独立で達成されたものではなく現在にいたるまで続いている大衆の真の意味での解放につながるべき課題であるとする、著者の現代ラテンアメリカへの認識を示している。著者の描くラテンアメリカ史像では、ラテンアメリカとは富と権力を握った寡頭支配階級が大衆を従属させ、彼らが選んだ対外的従属の道によってこの地域全体が欧米先進諸国に従属させられ、その結果大衆は二重に搾取されるという従属構造が19世紀を通じてできあがってしまった地域である。そして、この二重の搾取下に置かれた大衆が、20世紀に入ってようやく立ちあがり、解放のための闘争を開始し今日にいたっており、その闘争の過程がラテンアメリカ現代史である。このような大衆を収奪・搾取し抑圧してきた国家機構や社会・経済構造が近現代史を通じてどのように形成され作用してきたのか、また抑圧され続けてきた大衆が20世紀になってどのような形で支配階級に挑戦したのか、これらを解き明かすべく書かれたのが本書であるといえよう。究極的に、著者はラテンアメリカを未開発な発展途上地域で

はなく、確立された従属の支配構造の下で形成されたその歪んだ発展の姿を正そうとする「是正途上国」であると表現するのである。

以上のような明快な問題意識とラテンアメリカ史像を持った一人の歴史家によって書かれた本書は、従来とすれば史観の欠如した羅列的・記述的、あるいは主観的な英雄・人物史的にラテンアメリカ史が紹介されてきたわが国においては注目に値するものである。さらに著者が、特に1960年代以降ラテンアメリカ史の多くの分野で提示されるにいたった新しい視角・解釈など、言わば「書き直されつつあるラテンアメリカ史」の研究動向をも堅実に摂取していることを窺い知ることができ、著者のラテンアメリカ史と取り組む熱意が十分に感じとれる。また、この広大な地域の歴史をあえて大胆に一つの概史として、また一般書という形で手際良くまとめた点でも高く評価しえよう。しかしながら、これだけ広範囲な地域の歴史をカバーすることは大変な冒険であることも事実である。したがって、各分野の専門家の目からすれば問題となる箇所や誤りも少なくないであろう。本書評では、まず本書の内容に沿って著者のラテンアメリカ史像を整理し、ついで若干の問題と、特にメキシコ近現代史を専攻する書評者の立場からみた誤りをいくつか取りあげてみたいと思う。

## II

本書の構成は次のようになっている。  
はじめに

1. スペイン帝国の改革とクリオーリョ
2. 大衆の蜂起
3. スペイン帝国の解体
4. 独立と国際関係
5. ブラジルの独立と帝制時代
6. 独立後の国家と社会
7. 多難な国家形成の時代
8. 「近代化」と物質的進歩の時代
9. 変貌する中米・カリブ海地域
10. 大衆の登場と変革の時代

以上のような10章から構成されている本書は、その内容によってほぼ三つに分けることができる。その第1部は、19世紀はじめの独立運動の背景、そのおかれた環境および独立戦争そのものを扱った1章から5章までである。第2部は、独立によって出現した各地域の国家機構と社会の形成および発展過程を扱った6章から9章まで

であり、第3部として最後に歴史の担い手であるべき大衆が表舞台に登場する20世紀の展開を扱った第10章である。

第1部の主題は、19世紀はじめのラテンアメリカ諸国の独立の実態は何であったのかという問題である。著者は約300年間続いた新大陸におけるスペインとポルトガルの植民地が19世紀のはじめに本国から独立するにいたるその原因を、植民地体制そのものが生み出した諸矛盾であるところの内発的要因とフランス・イギリスを中心とするヨーロッパの国際関係の変化からくる外発的要因とに分ける。著者によれば、ラテンアメリカ地域の独立を促した要因は内発的なものよりも外発的なものの方がはるかに強かったのである。長期的視野からみれば、それはヨーロッパにおけるスペイン・ポルトガルの衰退とそれに対するイギリス・フランスの勢力拡大によるものであり、直接的にはナポレオンによるイベリア半島侵略であった。植民地時代末期に顕著となった原住民を中心とする反乱はハイチを除いては直接独立とは結びつかず、むしろ本国と一体感を持つ植民地のクリオーリョたちが自分たちの利益を守るために本国から独立することを決定したのであった。したがって、大衆の置かれた地位は独立によっても何ら変化することはなかったのである。各地で起こった独立運動は、指導者の能力、地域的利害、植民地統治体制の強弱、大衆の圧力の有無など、さまざまな要素に影響されながら多様な独立国家を誕生させた。しかし、これらの独立はラテンアメリカ地域がスペイン・ポルトガルに代わって新たにイギリスへ従属するという形で達成されたのだと著者は捉え、ラテンアメリカへのイギリスの影響力の拡大を「目に見えない帝国のはじまり」と名づけるのである。

第2部として扱うことができる6章から9章では、独立後各地に誕生する新たな支配体制の成立過程と社会・経済の変化および国際環境が概観されている。ここでは、政治的にスペインおよびポルトガルから独立したラテンアメリカ諸国で独立直後の混乱期を経た後に出現する寡頭支配体制がどのように形成されていき、この地域に進出してきた外部の諸勢力といかに結びつき、どのようにして大衆を取奪・搾取する社会・経済構造を作っていったかが描かれている。独立以降ラテンアメリカの大部分の国々が多難な国家形成の道を行ってきたが、著者によればそれは寡頭支配体制確立への権力闘争であり、またラテンアメリカの従属化をねらう外国勢力の圧力によるものであった。大衆の地位は植民地時代と変わらず、むしろ

抑圧の状態から脱出することはいっそう困難となった。

ラテンアメリカ諸国は、ほぼ1870年代から1880年代にかけて大きな転換期を迎えた。アルゼンチン、ブラジル、チリ、ウルグアイ、メキシコといった国々が政治的安定の時代に入り、第一次産品の輸出志向的経済体制が確立され、その下で繁栄を経験した。しかし、これは「欧米先進諸国への構造的従属」を確立したものであると著者は捉え、この歪んだ経済構造と発展のパターンは1929年の世界恐慌によってラテンアメリカに破壊的打撃を与えることになったとする。またこの時期は米国がイギリスに代わってラテンアメリカへ勢力を拡大していく過程でもあった。特にカリブ海地域、中米地域への米国の勢力拡大とその後の長期にわたるこれらの地域の政治的・経済的従属関係の成立過程が第9章で簡潔にまとめられている。

本書の本来のテーマは、著者自身も述べているように、以上の1章から9章、すなわちラテンアメリカの独立の背景、独立国家の形成、およびその後19世紀末までにいたるこの地域の発展を描くことにあった。そして最後の10章では、20世紀における大衆の登場がラテンアメリカの変革にどう貢献したかを簡潔に展望し、真の意味でのラテンアメリカの独立闘争は現在の問題であることにあったと思われる。しかし、著者のこのような意図にもかかわらず、本書の中心はむしろこの最後の章にあると言える。すなわち、この章では短いページ数の中で20世紀のラテンアメリカの変貌の過程が簡明に整理されている。著者は、20世紀ラテンアメリカ史の基本的分析視点を「目覚め、権力に挑戦する大衆」と「権力の維持をはかる寡頭支配勢力」の抗争におく。著者によると、19世紀末期の急速な経済発展とそれに基づく社会変化の中から目覚めはじめた大衆が寡頭支配体制に挑戦していく過程には二つのタイプがあった。その一つはメキシコ革命に代表される大衆の暴力的蜂起であり、もう一つのタイプはアルゼンチン、チリ、ウルグアイでみられた中産階級や開明的寡頭支配階級が両者の仲介的役割を果たした「民主主義的・漸進主義的」変革であった。このような大衆と寡頭支配勢力の抗争の展開過程を全体的に、著者は三つの時期に分けて整理する。第1段階を1900～1930年の時期とし、大衆運動が形成され、発展していった時期とする。この間、メキシコ革命が勃発し、各国で労働運動が盛んになり、共産主義運動が広がり、アブラ運動というラテンアメリカ独自の反帝国主義運動が起こった。次の第2段階は、世界恐慌にはじまる1930～60年であ

る。世界恐慌はラテンアメリカの支配層にとって「二重の危機」を意味していたと著者は指摘する。すなわち、欧米先進諸国に従属した第一次産品輸出経済は世界恐慌により壊滅的な打撃を受け経済的危機に直面したが、さらにこの経済危機によっていっそう困窮化した大衆の挑戦によって寡頭支配層は支配体制そのものの危機に直面した。この危機的状態に対処すべく打ち出された対応策によって、1930年代から1940年代にかけてのラテンアメリカ諸国は、軍事独裁体制による大衆の抑圧と輸出経済保持を目指す方向、および人民主義（ポプリスモ）のメカニズムを利用することによって大衆を巧みに体制の中に包摂していくと同時に工業化を計ることによって輸出経済の欠陥を是正していこうとする方向に大別されたという。すなわち前者の道を選んだのがカリブ海地域、コスタリカを除く中米諸国に現われた抑圧的独裁政権であり、後者の道を選んだのがメキシコ・チリ・ブラジル・アルゼンチンなどであった。

20世紀ラテンアメリカ史を挑戦する大衆と寡頭支配階級の攻防の展開と捉え、その第3段階としてあげられているのが1960年以降今日にいたる時期である。すなわち、この時期を特徴づけるものは、ラテンアメリカの歴史で画期的な意義を持つと著者が位置づける1959年のキューバ革命とそれを契機として新たに展開するラテンアメリカ情勢である。この間キューバ社会主義革命の余波に危機感を抱く米国の主導によりラテンアメリカ諸国は経済的社会的構造改革に着手したが、それは失敗した。しかし、ラテンアメリカ自体の中から新しいナショナリズムの頭角がみられ、やがてラテンアメリカ諸国間の協同関係を重視し、この地域の自立的な経済発展をめざす方向が現われた。ここに著者は米国の指導力と影響力の低下をみ、ボリーバル主義の現代的再生をみるのである。

### III

本書を読んだ全般的な感想を述べると、書評者のみならず本書の読者の多くは、必ずや著者の言う「大衆」とはいったい何なのか、その「大衆」を基盤にしたラテンアメリカという地域が本当に抑圧と従属という関係だけで歴史を展開させてきたのだろうかという疑問を抱くに違いない。なぜなら、本書の中からはラテンアメリカのさまざまな地域が外国の帝国主義的圧力や中央部の支配勢力の影響力のあるなしにかかわりなく独自の生き方を驚くほど執拗に発展させてきたという現実の歴史を窺い知ることにはできないからである。本書のようにラテンメ

リカの歴史を単に外的要因によって展開させられた「抑圧と従属の歴史」として描くことはラテンアメリカの歴史の一側面のみを強調することであり、決してラテンアメリカの全体史像を提示することにはならない。明らかにラテンアメリカにも内部的にダイナミックな活動があった。原住民インディオと白人の混血によって生じた混血社会、あるいは大量のヨーロッパ「大衆」移民の導入によって形成されたいくつかの国々の近代国家の形成過程にみられた歴史の展開もまた、対外関係史・中央権力闘争史に劣らず重要な歴史であろう。本書においては「独立」というものが対外的な関係でとり扱われているが、国内統合や国民文化の形成過程にみられた内発的な動きもまた「独立」につながる重要な要素である。この観点からみた問題点の一例を本書の中で具体的に示すと、210～212ページで記述されているメキシコ19世紀前半の時代がそれである。

この時期は、独立後のメキシコが財政的に国家的破綻をきたし、サンタ・アナという奇怪な人物が支配し、政治的混乱と経済の崩壊、外国勢力による侵略という時代として一般には特徴づけられている。本書でも、無力で無責任な指導者層の下で国内の混乱が続き、無謀な戦争が行なわれ、スペインからの解放が欧米勢力への新たな従属関係の形成へと転換する過渡期としての混乱の時代として描かれている。しかし、この見方は一面的にすぎ、メキシコの内発的な近代統一国家形成への努力と闘いをほとんど無視してしまった見方である。たとえば、1821年の独立達成から1824年の憲法制定にいたる過程がどのように展開されたのか。メキシコの連邦制度の形成は単に米国の連邦制を模倣したのではなくメキシコ統一の必要条件であったのではないか。そしてそのための連邦制の枠組が具体的にどのように組立てられたのか。各州の自治を重んじざるをえなかったがゆえに、ほとんどの財源を州へ譲渡し財政的に極度に弱体化した、対外的なシンボルとしての連邦政府の誕生がその後19世紀後半にいたるまでどのような具体的な意味をもっていたのか。これらの重要な問題について著者は全く触れていないし、むしろそれらを理解していないのではないと思われる。もし著者がこのようなメキシコ19世紀前半の歴史の展開を理解していたとしたら、少なくともこの時代の歴史についてのこのような曖昧な、主観的な記述はしなかったであろう。

本書では、農民の反乱や部族の蜂起が「抑圧された大衆の反撃」として記述の中に登場してくる。反乱する大衆

の怒りは寡頭支配勢力に対するものであり、反乱は大衆の存在の示威であり、また反帝国主義運動であったとされている。しかし、個々の反乱の史的事実の客観的な分析なしに、大衆の反乱や農民の蜂起を短絡的に、一挙に支配体制への挑戦であり反権力運動として捉えることには疑問がある。特に近年地域史研究がすすめられ意欲的な実証的研究が発表されているメキシコ史に限ってみれば、中央史的な史観を脱した事象の捉え方が可能であり、また必要であろう。たとえば、本書ではメキシコ革命は大衆による寡頭支配階級への全面的な暴力による挑戦であったとされている。メキシコ革命は多くの農民・大衆が内乱にまき込まれ武器を手にして闘ったという現象面からみれば、確かに著者の言うように大衆の挑戦であったといえよう。しかし、メキシコ革命がいったい「革命」であったのかという議論は別にしても、メキシコ革命はむしろ支配層の内部抗争から発展した武力闘争が大衆をまき込んだものであり、支配層の利益追求のために新たな秩序が再編成されたという見方も考慮に値するものであろう。

著者のラテンアメリカ現代史の捉え方で、この地域が工業化へ移行する時期の扱い方も論議を呼びおこそう。著者によると、ラテンアメリカ諸国は世界恐慌の大打撃を契機として輸入代替の工業化政策をとるにいたったという。国によってその時期は厳密には異なるであろうし、またさまざまな見方もとられてはいるが（19世紀末、第1次大戦、世界恐慌、第2次大戦など）、第2次大戦を契機とする方がより一般的ではないだろうか。

説明不足ないし誤解から生じたと思われる事実関係の誤りが少なからずみられる。文脈の中でとらえる限り大きな誤りであるとは言いがたいものもあるが、ラテンアメリカ史がわが国ではあまり知られておらず、書物も少ないという現状を考慮する時、啓蒙的一般書を著す著者は事実関係の誤りを犯さないために最大の注意を払うべきであろう。以下、例として明らかに誤りであるものをいくつか指摘したい。

1870年代のメキシコの人口を約200万人としているのは、どう考えても誤りであろう（224ページ）。ディアスが創設した農村警備隊とあるのは（287ページ）Ruralesを指すものであると思われるが、そうであれば誤りである。Rurales＝農村警備隊は1861年にファレス大統領によって創設されたものである。「無責任、無節操、粗野な」メキシコの政治家・軍人として描かれているサンタ・アナは、著者によると1833年から1855年にかけて4回大統領

になったとされている（211ページ）。この時期のメキシコの大統領制を考えると、就任回数はほとんど意味をなさないから4回という数字が誤りであろうと大きな問題ではないとも言えるかもしれない。しかし、本書の中では、先にも指摘したように特にこの時期のメキシコ史の扱いが粗末にされているところであるため敢てとりあげた。*Diccionario Porrúa: historia, biografía y geografía de México*によれば、サンタ・アナは11回大統領となっている。また同書には、この時期の歴代連邦政府閣僚のリストが収録されていることもつけ加えておきたい。また、340ページに掲載されているホセ・エンリケ・ロドは、アルゼンチンの作家とされているが、ウルグアイの作家である。

以上のような史実の誤りからも窺えるように、本書は全般にわたって必ずしも同じような緻密さで書かれているわけではない。著者が専門とする20世紀や国際関係を扱ったところでは、すぐれた洞察と明解な分析視点とで歴史の展開が簡明に整理されているが、残念ながら、おざなりな、不正確な、あるいは主観的な記述の箇所も見受けられた。しかし、全体としてみれば本書が出版された意義は大きく、啓蒙書としての価値ばかりでなく、わが国のラテンアメリカ史研究者へも与えるべき示唆に富んだ本である。

最後に、本書だけでなくラテンアメリカ研究者全体への注文であるが、ラテンアメリカに関する人名・地名・翻訳不可能な用語などの表記について統一した表記の基準の確立が要請されるのではないか。「サンタ・アナ」か「サンタ・アーナ」か、「カリヤオ」か「カジャオ」か、「ベリヨ」か「ページョ」か、読みながら気になったことを付け加えたい。

（中央大学講師 岡本伊代）